



写真-1 加古川右岸堤防から JR 加古川線・第三加古川橋梁を撮影（平成27年4月）

■ 平成 16 年災害を契機に架け替えられた第三加古川橋梁

写真-1 は、加古川と右支川・杉原川の合流点に架かる JR 加古川線・第三加古川橋梁を撮影したものです。この橋は平成 16（2004）年の台風 23 号災害を契機に、加古川河川激甚災害対策特別緊急事業の一環として架け替えられ、橋長 224m の単線・下路ワーレントラス橋として平成 22（2010）年に完工しています。

現在、この橋付近で加古川と杉原川が合流していますが、昭和初期以前は全く異なる状況でした。

■ 昭和初期に加古川の蛇行部をショートカットし、廃川敷を埋め立てる

大正末期まで加古川の本流は、図-1 のように下戸田から川下神社の南側を流れていました。しかし、水はけが悪く、大雨で付近一帯がしばしば冠水したことから、昭和初期に加古川を播丹鉄道※¹（現・JR 加古川線）沿いに直流させ、ショートカットする工事が行われました。

新川への通水後に旧河道は廃川となり、昭和 17（1942）年西脇区に対し公有水面の埋立が許可されました。ただ戦時下であったため埋立工事は進まず、本格的に埋立が開始されたのは戦後の昭和 23（1948）年でした。

なので、米軍が昭和 22（1947）年に撮影した空中写真（写真-2）には加古川の旧河道が明瞭に残っています。

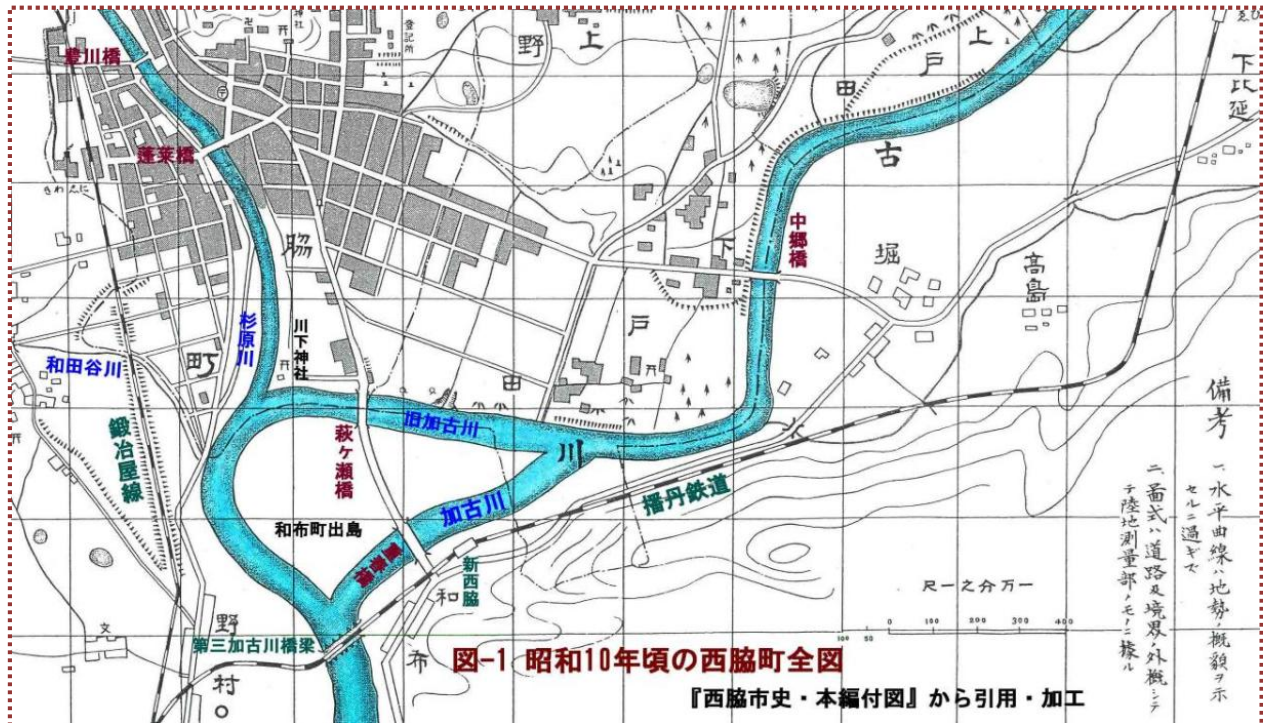
埋立には 3 年を要し、その大部分は宅地として売却されました。



写真-2 川下神社

旧加古川と杉原川の合流点付近にある川下神社の境内には、昭和 29（1954）年 3 月 20 日に建立された「萩ヶ瀬（はながせ）廃川敷埋立記念」碑（写真-3）があり、傍らの西脇市教育委員会が平成 6（1994）年に建てた説明板には P.3 のような説明が記されています。

なお、境内に立つ西脇地区まちづくり委員会の案内板によると、「川下神社は、その昔、加古川、杉原川、和田谷川が合流する波荒い地に建てられた。高瀬舟による川運の安全を祈ったとされる」とのことです。



萩ヶ瀬埋立地

昭和初期まで加古川の本流は下戸田から戎町の川下神社南側（現在の上水道第1水源地从総合福祉センター萩ヶ瀬会館）へ流れていて水はけが悪く、大雨が降ると付近一帯がしばしば冠水し、水害を記録した古文書も多く残っています。

大正末期になって、本流を下戸田から播丹鉄道（現在のJR加古川線）沿いに野村滝の方向へ直進させる付け替えが行われることになり、その予定地はもともと加古川の古い河川敷で耕作地として使用されていた所に決定されました。

新川の掘削で出た土砂は出島の嵩上げに使用され、新しく新川に架けられた重春橋は昭和3年8月10日に竣工しましたが、当時としては珍しい鉄筋コンクリート橋でした。さらに、播丹鉄道の鉄橋も延長され、延長された部分は現在も橋脚の違いでわかります。その数年後、新川への通水が行われて旧本流は廃川となりました。

昭和17年6月30日には、西脇区に対し旧本流の埋立が許可されましたが、戦時下のため工事は進まず、本格的に埋立が開始されたのは終戦後の昭和23年6月1日のことでした。埋立工事は約3箇年を要して完了し、旧本流に架かっていた萩ヶ瀬橋も取り除かれました。埋立てによってできた造成地は約53,500m²（約16,200坪）に達し、その大部分を宅地として売却して全事業を終了しました。

杉原川も昭和4年に護岸工事が開始され、続いて昭和7年からは現在の中本町、南本町の埋立が実施されています。

上記説明の中で、「予定地はもともと加古川の古い河川敷」とありますが、この点について西脇市郷土資料館によると、「加古川付け替え前の和布町地籍図（字限図）に、南北方向に水田化された旧河道と湧水地が描かれており、旧河道であった場所を開削したことが分かる」とのことでした。

また、「新川の掘削で出た土砂は出島の嵩上げに使用」の出島は、新旧加古川と杉原川に囲まれた区域で、和布町出島の地名が説明板の地図に記されていました。

「萩ヶ瀬」の地名については、西脇地区まちづくり委員会の案内板によると、杉原川が加古川に落ち合う（合流する）所を「萩ヶ瀬」というとあり、その理由を「里人のいひけらくは、昔此のわたりにいと大きな萩の木ありしをきりて、西仙寺といふ寺の観音ぼさちの堂の柱になして、松もてうゑつきたれば、さはいふとなむいひける……」と記しているのですが、筆者にはチンプンカンプン。

ただ、西脇市郷土資料館によると、川下神社や総合福祉センター「萩ヶ瀬会館」のあたりは元々「萩ヶ瀬」と呼ばれていて現在の小字も「萩ヶ瀬」となっているそうです。

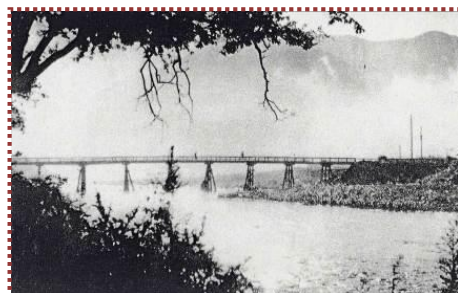


写真-5 昭和14年の萩ヶ瀬橋（まだ流れがある）

※1 播丹鉄道：明治44（1911）年5月18日、加古川水系の舟運を代替する目的で設立された播州鉄道は、大正12（1923）年12月21日その路線を播丹鉄道に譲渡する。昭和18（1943）年6月1日播丹鉄道が国有化され、加古川線となる。

■ 継ぎ足された第三加古川橋梁

大正13（1924）年12月27日に播丹鉄道・野村駅一谷川駅間が延伸開業し現在の加古川線が全通しますが、この時に第三加古川橋梁（5連のガーダー橋）も完成しています。

ところが、完成後間もなく加古川の付け替えに伴い加古川と杉原川の合流点がちょうど第三加古川橋梁付近にきて川幅が広がることから、第三加古川橋梁は左岸側に8連を継ぎ足し13連のガーダー橋に改築されました。

写真-5の短スパン部が継ぎ足し部です。継ぎ足し工事の施工は播丹鉄道と思われますが、費用負担は原因者である西脇区のはず。



写真-6 加古川線・旧第三加古川橋梁
（『北播磨ローカルネットワーク』HPから引用）

■ 付け替えられた加古川に重春橋を架設

加古川の付け替えにより切り離された西脇市街地と播丹鉄道の新西脇停留所（現・JR 新西脇駅）を結ぶ橋として、重春村が重春橋を架けています。開通したのは昭和 3（1928）年 8 月 10 日で、当時の重春小学校（現・野村公園）において重春村主催で竣工式が行われたという記録が残っています（新川開削によって村を分断した原因者が費用負担すべきでは）。

鉄筋コンクリート造の橋は、橋長 84 間（≒153m）、幅員 20 尺（≒6m）で、架設から 30 年が経過した昭和 33（1958）年 1 月に大規模改修が行われ、平成 2（1990）年には歩行者と自転車専用の人道橋が併設されました。



写真-7 旧重春橋（西脇市HP「ふるさと探訪」から引用）

■ 平成 16 年災害を契機に激特事業の一環として第三加古川橋梁や重春橋を架け替え

平成 16（2004）年 10 月の台風 23 号では、気象庁西脇観測所において総雨量 209mm を記録し、加古川の水位も近畿地方整備局の板波水位観測所において計画高水位 6.1m を約 2m 上回り、西脇市域において死者 1 名、建物被害 1,776 戸、浸水面積 424ha の被害がありました。

県は再度災害防止対策として加古川河川激甚災害対策特別緊急事業（以下「激特事業」）による河道改修等を実施することに。事業区間延長は、加古川 4.0km、野間川 1.3km、杉原川 0.6km、計 5.9km、その中で河積拡大に伴い 6 橋（野村橋、JR 第三加古川橋梁、重春橋、岩井橋、JR 板波川橋梁※2、重国橋）が架け替えられ、板波下・板波上・野村の 3 井堰統合などが行われました。



写真-8 平成 16 年災害記念碑（西脇大橋西詰）
後方を流れるのは杉原川

※2 板波川橋梁：JR 西日本に確認したところ、この橋名で管理しているとのこと。恐らく架橋当時、「野間川」を「板波川」と呼んでいたと思われる。



図-2 萩ヶ瀬周辺の地図

■ 第三加古川橋梁の架け替え

右の写真は、JR 加古川線の第三加古川橋梁（単線）を加古川左岸堤防から撮ったものです。旧橋（13 径間）の上流側に架設された新橋は、橋長 224m、耐候性鋼材を用いた 3 径間の下路式ワーレントラス橋で、平成 22（2010）年 12 月 26 日に加古川線第三加古川橋梁完成出発式が西脇市駅にて行われています。

なお、河川と鉄道が交差する箇所に架かる鉄道施設の改築を行う場合には、「河川工事に起因して生じる鉄道工事について」（平成 14 年の国土交通省河川局長通達）等に基づき、河川の管理並びに鉄道の運転保安および施設管理の重要性を考慮し、事業主体と鉄道事業者の技術力および経済性を勘案して鉄道工事を施行する者を決めることとされており、ほとんどの場合、事業主体は鉄道事業者に鉄道工事を委託して施行させています。本橋の場合も兵庫県から JR 西日本に施行委託しているようです。



写真-9 第三加古川橋梁

■ 重春橋の架け替え

写真-10 は、激特事業の一環として一般県道 347 号・和布西脇線に架けられた重春橋です。旧橋撤去後に新橋を架設、平成 22（2010）年 11 月 13 日に開通し、旧橋では制限されていた大型緊急車両が通行できるようになりました。

新橋は耐候性鋼材を用いた 3 径間連続箱桁橋で、橋長は 151m、車道幅員 10.5m、幅員 3.5m の歩道が両側に設けられています。

なお、橋名の「重春」は明治 22（1889）年～昭和 27（1952）年にかけて多可郡にあった村名・重春村に因んでいます。その村名の由来は、古くは板波・野・高松山・和布新田の各村を重国郷、谷・高田井・和田・平野新田の各村を春日郷と称していたことから、その頭文字をとったものです。昭和 27（1952）年に西脇市の一部となり、平野新田は平野町、高松山は高松町、和布新田は和布町、野は野村町と改称、他の 4 大字とともに同市の町名となっています。

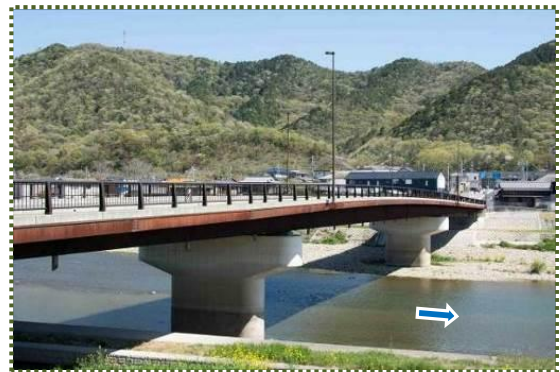


写真-10 重春橋

■ モノローグ

ここまでまとめてきて気になったのが、加古川ショートカット等の事業主体は誰で費用負担はどうしたのか、ということです。

この点について『西脇のあゆみ』によると、昭和 3（1928）年 3 月 21 日の西脇区長日誌に「杉原川改修（加古川では？）および埋立工事は、昭和 3（1928）年度に県と交渉し、県規定の工事費補助を仰ぎ、西脇町の名義の下に西脇区がその権利義務を専有し、かつ町債を起し、これを西脇区において利用負担し弁済方法を実行すること。工事完成とともに埋立地および官有地の無償払い下げを受け、これを相当処分し、漸次債務の弁済を行うものとする。」とあり、名義上西脇町を事業主体とし、実質的には西脇区が事業を遂行、埋立地の売却益を債務の返済に充当したようです。ただ、細部についてはまだいくつか疑問点が残っていますが、資料が少なくこの辺が限界のようです。

マツバギク（松葉菊）

ハマミズナ科マツバギク属の多年草（多肉植物）で南アフリカ原産。日本へは、明治初めに渡来、観賞用として花壇や石垣などで栽培されている。葉が松葉のような形で、菊に似た花を咲かせることからこの名がついている。開花時期は 4～6 月で、這うように成長するのでグラウンドカバーとして利用でき、花壇や石垣、ロックガーデンなどに植栽すると開花中は見事な光景になる。高温や乾燥に強い上に、大きい群落になるが、多湿による蒸れには弱い。

重春橋右岸下流の擬石ブロックに植えられていた。なお、マツバギクの背後に見える黄色い花は、ベンケイソウ科のコモチマンネングサ（子持ち万年草）。



写真-11 加古川の堤防法面に咲くマツバギク
背後の見える黄色い花はコモチマンネグサ



写真-12 マツバギク

【参考資料】

- 1 『西脇市史・本編付図』 西脇市史編纂委員会 昭和 58 年 3 月
- 2 『橋梁年鑑データ～第 3 加古川橋梁』 日本橋梁建設協会
- 3 『ふるさと探訪～萩ヶ瀬埋立地、重春橋』 西脇市 HP 令和 3 年 3 月更新
- 4 『ふるさとの思い出写真集・西脇』 脇坂俊夫編 令和 3 年 10 月
- 5 『加古川線、鍛冶屋線、マツバギク』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 6 『加古川線第 3 加古川橋梁完成供用開始』 北播磨ローカルネットワーク HP 平成 22 年 10 月
- 7 『橋梁年鑑橋梁詳細データ：第 3 加古川橋梁、重春橋』 日本橋梁建設協会橋梁年鑑
- 8 『重春村』 角川日本地名大辞典
- 9 『平成 20 年度決算検査報告』 会計検査院 HP <https://report.jbaudit.go.jp/org/h20/2008-h20-0481-0.htm>
- 10 『西脇のあゆみ～西脇区制施行八十五周年記念』 西脇区編 平成 4 年 7 月
- 11 『マツバギク(松葉菊)とは？育て方・栽培方法』 LOVEGREEN

※発行：令和 5 (2023) 年 9 月 『ひょうご水百景』 No.181

改訂：令和 8 (2026) 年 7 月 『ひょうご水百景』 No.181